

シルクロードにおけるオアシス文化
—ホータン地区を中心に—
Cultural oasis on the Silk Road- A Case Study in Hotan

亜力坤・吐松尼牙孜

Yalkun tursunniyaz

ホータン師範専科学校人文学院

Institute of Humanities of Hotan Teachers College

E-mail:ym190@hotmail.com

Abstract

Connecting Eurasia, eastern and western civilizations, "Silk Road" also connected a series of small and large oasis in China. Since ancient times, many of these oasis were highly developed with a high degree of agriculture land and livestock. Based on this evidence, a highly developed commercial civilization came into being. Hotan is an important oasis located at a junction of the southern branch of the Silk Road in Chinese territory, Hotan has been one of the key central commercial cities of human activities on the Silk Road for thousands of years.

This paper systematically introduces the environment and history of the oasis of Hotan. Looking in detail at the lives of the Hotan Uyghur culture from basic necessities such as clothing, food and housing, to religious beliefs and taboos of the region. This paper examines the rich cultural openness and diversity of the Hotan Uyghur culture.

Keywords: Silk Road; oasis culture; Hotan; Uighur;

シルクロードは東西の文明を繋げる文化の道と言われ、長い間歴史学、考古学、美術史や民族史などで高い関心を持たれた分野である¹⁾。と同時に、文化人類学、民俗学や文化遺産研究の領域においても、シルクロードは重要な研究対象と研究課題にもなっている。西域の歴史・言語などについて、シルクロード研究の成果は非常に豊富で、数多

1) 本稿は2014年6月14日に愛知大学国際中国学研究センター（ICCS）と愛知大学国際コミュニケーション学会共催で開催された公開研究会における講演記録にもとづいている。司会を務められた周星教授、中国語原稿の邦訳をされた周橋君、日本語のネイティブ・チェックをされた東隆弘君に心より感謝を申し上げる。

く蓄積されてきたことに比べ、文化人類学や民俗学からシルクロード沿線の住民に対するフィールドワーク調査や実証的な研究は比較的薄弱である。中国の文化人類学と民俗学において、中国領内のシルクロード沿線のオアシス文化について、体系的な論述や報告などはいまだに稀であるため、本報告は新疆ウイグル自治区のホータン地区を事例として、中国領内のシルクロードにおけるオアシス文化を概説の形で整理することにより、今後の更なる研究に若干必要な資料を提供出来ればと思う。

中国領内のシルクロード

「シルクロード」は中国語の略称で「絲路」と言われている。「シルクロード」という用語は、19世紀にドイツの地理学者リヒトホーフエンがその著書『シナ (China)』(1巻、1877年)においてザイデンシュトラセン (Seidenstraßen: ドイツ語で「絹の道」の複数形) として使用したのが最初である。そのあと、様々な議論が繰り広げられたが、広義の「シルクロード」は太古より脈々と継続されていたユーラシア大陸または北アフリカや東アフリカなど広大な地域を含める幾つかの貿易や文化交流の道の総称である。この概念は約紀元前5世紀にすでに開通した草原シルクロードや、中世形成されかつ宋代において巨大な役割果たした海のシルクロード、西北中国のシルクロードと同時に併存していた陸上の南方シルクロードなどが含まれる。

ところが、「シルクロード」という用語は通常ユーラシア大陸北部の隊商路を指すが、それと対照しているのは南方の茶馬古道である。前漢時代に張騫は西安を起点とし、東漢時代に班超は洛陽を起点とし、西域に使者としてそれぞれ派遣された。関中平原、河西回廊、タリム盆地を通して、シルダリヤ川や烏潯川の間のオアシスを経て、イランまで辿り着き、地中海諸国との陸上通路を結んだ。この道は後ほど「陸上のシルクロード」と名付けられて、その後にも他の「シルクロード」の名と称される交通路線と区別される。陸上のシルクロードを通じて、西へ運んだ品物の中ではシルク製品の影響が最も大きかったので、ゆえに「シルクロード」と命名された。陸上のシルクロードは南の道、中道、北の道など3つの路線が含まれていることは両漢の時代には既にほぼ確定されていた。

陸上のシルクロードは全体として東段、中段、西段の3段に分かれており、それぞれが特に中国領内において、また南の道、中道、北の道など三つの路線に分かれている。

東段とは洛陽から長安を通して、玉門関、陽関までである。これは前漢時代にすでに開拓されたが、前漢の時は、長安を起点として、後漢の時は洛陽を起点とした。即ち、さらに東へ延ばされた。

中段: 玉門関から陽関を経て西へ、葱嶺までである。前漢時代にこれを最初に開拓した。

西段：葱嶺から西へ、中央アジア、西アジアを通して、ヨーロッパに至る。これは後漢時代及びその後に関拓したものである。

上述の中段は、主にタリム盆地境内の諸路線を指しているが、オアシスや砂漠の変化に伴って流動的でもあった。この中段は唐の安西四鎮（貞観14年即ち640年に設立）一帯にあたるが、また多くの道に分かれており、南の道、中道、北の道など3本の路線を含んでいると言われている。

南の道はホータン道とも呼ばれている道である。敦煌からホータン、ヤルカンドなど、タクラマカン砂漠南縁のオアシスを辿ってパミール高原に達する南方のルートで、漠南路とも呼ばれる。オアシスの道の中では最も古く、紀元前2世紀頃の前漢の時代には既に確立していたとされる。

中道は、敦煌からコルラ、クチャを経て、天山山脈の南麓に沿ってカシュガルからパミール高原に至るルートで、漠北路ともいう。西域南道とほぼ同じ頃までさかのぼり、最も重要な隊商路として使用されていた。

北道は敦煌または少し手前の安西から北上し、ハミまたはトルファンで天山南路と分かれて、ウルムチを通り、天山山脈の北麓沿いにイリ川流域を経てサマルカンドに至るルートで、大体紀元後に開かれたと言われる。

上述したように、「シルクロード」と言う概念は、商業貿易や文化交流の道を指して、「中段」は主に中国新疆ウイグル自治区の境界内に分布しており、また地理環境や生態条件などの影響をうけて、南の道、中道、北道などの道に分かれて、それぞれ大量の古いオアシス都市、仏教石窟、墓地などの遺跡、遺物が点在して、これらは中国領内のシルクロードが全体のシルクロードの中で非常に重要な地位を占めていることを意味している。

20世紀80年代、日本のNHKと中国が共同で撮影制作した大型のシリーズテレビ番組『シルクロード』および最近、再度国際共同制作で『新シルクロード』は日本国内や中国国内だけでなく、また東アジアや世界において、シルクロードに大きな関心を引き起こした。

シルクロードの要衝：オアシス都市和田（ホータン）

ホータンは中国領内のシルクロード中段の南道における1つの重要な要衝であり、歴史的に見ても、シルクロード沿線のオアシス都市として、長らく人類が最も頻繁に活動している地域でもあった。

ホータン地区は中華人民共和国の新疆ウイグル自治区の最南端にあり、タリム盆地の南縁、崑崙山脈の北麓に位置している。ウイグル語で ئوتۇن と表記され、中国語の旧称が「于闐」（ウテン、*üdün*）である。1959年に「和田」に改称された。ホータ

ン地区の総面積は 24.78km² で、その中の 33.3% は山地であり、63% は砂漠であり、人類の居住するオアシスの面積はわずか 3.7% しかしめていない。そのうえ、面積のわずか 3.7% のオアシスも砂漠の影響により、さらに大きさの違う 300 余りの陸地に分割されている。

ホータンはケッペン（[1846～1940] ドイツの気候学者）の気候区分では、内陸の砂漠気候に属している。年間の降雨量は極めて少なく、平均 35 ミリであり、一部のオアシスにおいて、年間の降雨量はわずか 50 ミリもない。しかし、年間の蒸発量はとても大きく、年間の平均蒸発量は 2480 ミリまでに達する。ユーラシア大陸の内陸に位置しているため、タリム盆地の南縁にあるホータンは西部の天山に妨げられ、大西洋からの水蒸気は入りにくく、南は昆仑山の遮断で、インド洋から低緯度の暖かい気流も入りにくい。そのため、オアシス都市ホータンでは極度に水蒸気が不足しており、きわめて典型的な乾燥気候になり、気温が比較的高くて、昼夜の温度差が激しい。それに、ホータン地区は北東風と北西の強い風の交いあう地帯でもあるので、埃、浮塵や砂嵐の悪天候が比較的多発し、特に毎年 3—5 月の春は、植物がまだ芽生えたばかりで、砂嵐を防ぐ能力がとても弱いので、風と砂が一面に広がっている。

ホータンのオアシスは主に 7 つの小さなオアシスから構成されており、東から西まで順にニヤ（民豊）県、ケリヤ（于田）県、チラ（策勒）県、ロプ（洛浦）県、ホータン（和田）県、ホータン（和田）市、カラカシュ（墨玉）県、グマ（皮山）県などである。上述したそれぞれのオアシスの間には砂漠がある。内陸の乾燥砂漠地域の厳しい環境に置かれるホータンのオアシスでは、その生態環境はきわめて脆弱である。このような厳しい自然環境や生態条件の下で、ホータンで生活している人々は、自然環境に適応する道を選んで、調和的な発展の生存方法を考案・創造したのである。ウイグル族はホータンの主要な民族であって、オアシス農業を主要な生計とする。ほとんどのウイグル族は農村に定住し、伝統的な生活様式を維持して生きている。これらの生活様式は数千年前より、周辺に厳しい自然生態環境に適応した結果とも言える。2010 年 11 月 1 日に行われた第 6 回国勢調査のデータによると、ホータン地区の総人口は 201.44 万であり、その中にウイグル族は 96.3% を占めており、漢族は 3.5%、その他の民族は 0.2% をそれぞれ占めている。統計によると、ホータン地区ではウイグル族、漢族、回族、タジク族、キルギス族など、合わせて 22 の民族が共に暮らしている。

ホータンは長らく昔から、オアシス農業を営んでいる。オアシスの命ともいえる水源は、カラコルム山や昆仑山の氷河と積雪を源として、溶け水はタリム盆地の南縁に向けて大きさの違う数十の川が流れ、その恵みにより、ホータンの幾つかのオアシスを作ったのである。ホータンのオアシスでは、古来、栽培される農作物は、大麦、小麦、キビ、稲、アワ、豆類、ハダカムギなどの食糧や経済作物がメインであり、綿花、大麻、ごま

(胡麻) などもあり、蔓菁 (カブラ)、タマネギ、中国パセリ、ニンジンなどの野菜が豊富である。ホータンのオアシスに住んでいるウイグル族の農耕生活は、素朴で、その主な生産用具からいえば、まだ伝統的な形態にとどまっている。例えば、農機具はカントマン、すきの刃、アラ、鉄鋤、斧などが主流である。ホータン地区の土壌は柔らかいため、よく使われるカントマンは新疆におけるその他の農業地域のカントマンより、比較的小さくて薄い、楕円形を呈している。

ホータンのオアシスは古代より「果物の故郷」と誉められてきた。「果樹園を持たない人には生命もない」という俗語から見ても分かるように、ホータンオアシスのウイグル族は園芸業を重視している。ホータンなどのオアシスにおいてもほとんどの農家は田畑、庭、街の周辺などで、面積はそれほど大きくはないが必ず、綿、野菜、またはブドウ、桃の木、アンズの木、リンゴなどを栽培している。

ところが、ホータンのオアシスでは、古い時代から今なお農業を牧畜業と結び付ける特徴がある。それゆえ、この地区の牧畜業も比較的発達していて、一定の管理制度までに形成された。例えば、考古学の発見したニヤ (民豊) 第 19 号の古文書の中で「指定された場所で放牧している女性がいる。国王はその場所へ部下を行かせて、彼女が確かにそこで放牧しているかどうかを調査・確認させた。本当に指定された場所で放牧しているなら、決められた関連法律に基づいて、彼女に衣服、食べ物や工賃などを交付する」と言うような記録がある。これらの文書から、ホータンのオアシスで暮らしていたウイグル族の先人たちは、牧畜業に対する管理や賞罰措置などを長らく昔から規則正しく行っていたことが分かる。

民族と文化の十字路

ホータンのオアシスでは、古来より人類が生息していた。今から約 5、6 千年前のホータンではすでに、新石器時代の文化が栄えていた。ニヤ (民豊) 県、ケリヤ (于田) 県、グマ (皮山) で、当時造られた精密な細石器が多く発見されて、それはその時代の主要な生産用具であった。紀元前 4—3 世紀にホータン地区ではすでに農耕社会に入った。農耕経済の発展に伴って、于闐国が紀元前 242 年に建立された。紀元前 60 年、前漢王朝は西域で都護府を設立し、西域 36 国を漢王朝の版図に入れたが、その中にはホータン地区の 6 つの国が含まれていた。『後漢書・西域伝』の記載によると、前漢の將軍班超が西域、特にそれぞれの勢力に割拠されたタリム盆地を統一した時に、于闐国は班超の歴史的な任務に忠実に協力していた。魏晋の時代に、徐々に強くなってきた于闐国は嘗て他の 5 つの国を統一し、結局、今日のホータンオアシスとほぼ同じ範囲を支配したという歴史の記録がある²⁾。

長い歴史から見ると、羌人、塞人、漢人、吐蕃人、ウイグル人など、数多くの民族或

いは民族グループがホータンのオアシスに移住し、生活していた。羌族は中国の最も古い民族の一つであり、歴史の記録によると、紀元前5世紀、羌人はタリム盆地の南縁やパミール高原などの地域で分散居住したことがある。6世紀の初めごろ、于闐の南山当たりで居住する諸民族は、やはり羌族をメインとしていたが、その後彼らは徐々にウイグル族、チベット族と融合したと言われる。

塞人は于闐人の祖先でもあった。塞人はインド・ヨーロッパ語族の民族集団であり、上古時代にかつてシルダリヤ川流域、カスピ海の東側、伊犁河流域、パミール高原などの広範囲に分布していた。羌人やアリア人と一定の血縁関係があると言われる。「この民族（塞人）の人々の目は青緑であり、馬術を得意とする。主に遊牧し、かなり広い地区に分布した。新疆領内において、塞人の一部分は天山山脈の北や伊犁川流域に、また一部分はパミール山地や天山山脈の南にそれぞれ定住していた。天山山脈の南に定住した塞人は早くも紀元前20世紀の頃、タリム盆地の幾つかのオアシスにやってきた」³⁾。塞人はかつて天山山脈の北と南の各地に分布したが、その後、他の民族集団、例えば、柔然、月氏、烏孫、回紇などが続々と台頭したことによって、以前の地元民としての塞人は移住させられ、消滅したり同化させられたりした。結果として、中国の長い歴史の中からその姿が消え、いなくなった。前漢の時代にかつてパミール高原で暮らしていた塞人は于闐へ移住したことがあるとホータン博物館の李吟屏先生は考えた。現代ホータン人の祖先は古代の遊牧民＝塞人であり、彼らウイグル族の先人としての回鶻は西へ移って新疆地区に入ってくる前に、独特な言語や文字または文化を持っていたが、前漢の時代から中原王朝とも密接な関係を築いた。前漢の時代に、中原より2万余りの兵士が西域開墾のため派遣されてきたことがある。これら漢民族の人々の一部分がホータンまでに到達し、定住したこともある。

唐の玄奘の『大唐西域記』第12巻に、「瞿薩旦那」（すなわち、ホータン）について、インドの文字や制度をアレンジし採用しているが、言葉は周辺諸国とやや違ふと記載されている。敦煌で発見された于闐古文書によると、かつて瓜州（今甘肅省安西）、沙州（今甘肅省敦煌）を支配していた割拠政権＝金山国の白衣天子張承奉の妻は于闐の公主であり、彼女は于闐王李聖天へ手紙や詩を送ったが、その時に使った文字は古い于闐文字であった。ニヤ（民豊）、ケリヤ（于田）、鄯善（今若羌）あたりで通用した言葉は主に古代インドの西北方言であって、ニヤ（民豊）俗語とも呼ばれた。言語学者はそれをインド・ヨーロッパ語族の東イラン語族に帰属された。この地域で使用された文字も主に古代インドの西北部において通用した文字であり、一般的には佉盧文（「カローシュティー

2) 高衛東、姜巍：「塔克拉玛幹沙漠西部和南部沙塵暴的形成及危害」、『幹旱区資源與環境』2002年第三期5。

3) 艾力江・阿西木：「論新疆和田人的特殊性格之歷史淵源」、『内蒙古民族大学学報（社会科学版）』2003年第4期。

文字)と呼ぶ。その後、この地方では「婆罗密」文字も使用されたことがある⁴⁾。

古代の吐蕃は于闐に対して非常に重要且つ深い影響を与えた。吐蕃は唐太宗の時代に新に新興した強国であり、『敦煌本吐蕃歴史文書』の「大事紀年」によると、紀元663年に吐蕃王朝の軍隊は4年にわたって征服戦争を繰り返して、ようやく吐谷渾を打ち破った後、鄯善、且末などのオアシスをも占領し、その吐蕃の勢力は阿爾金山を越えて西域に入ってきた。その時、于闐は唐の軍隊の協力や支持を受けたおかげで、吐蕃の西進に全力を挙げて抵抗した。「吐蕃はチベット族の古い称呼であり、彼らの居住地は今の新疆に隣接している。紀元670年、吐蕃は唐の安西四鎮を奪い取って、南疆に入った。692年、唐の軍隊は安西四鎮を奪回し、吐蕃を追い払った。755年、安史の乱以降、吐蕃の軍隊は再びタリム盆地を攻め、南疆をすべて制圧した。その後866年になってようやく新疆から撤退した。吐蕃は南疆を支配した時に、各地域で大量の軍隊を駐在させ、長期間駐留した。大勢の吐蕃人も徐々に南疆に入植し農耕や放牧を営んで、地元住民と雑居し融合した」⁵⁾。即ち、吐蕃の勢力に征服された670年から、吐蕃の制圧から解放された866年までの間に、かつて一部の吐蕃人はホータンに移住してきたことがある。紀元840年（開成五年）、ウイグル族の先人である回鶻が砂漠の北の草原から西へ移動してきた前に、ホータン地区を含む新疆南部では、人種や文化の多様性に富んでいることが自明であり、主にアリア人の分枝と言われる塞人は漢、吐蕃、モンゴルなどの民族グループと融合し、約2000年の年月を経て、次第に同化し、ウイグル族の一部になった。

于闐国王李聖天の在位した時期は912—966年であり、その祖先の一人、尉遲勝がかつて唐の王女を妻として迎えたため、唐と親戚になって、唐の皇室の血筋を汲んでいることから、自分の姓を「李」に改姓し、支配下の範囲で中原の儒家などの漢文化を導入・普及させた。即ち、当時に于闐国では漢文化が相当な程度まで浸透したとも思われる。

その後、喀喇汗王朝は于闐を征服した。「971年から、喀喇汗王朝のアスランハンムサは仏教の中心地であった李氏王朝を征服するため、戦争を行い始め、この戦争は20年余りにわたって行われた」⁶⁾。紀元1001年に、ブグラハンハサンの息子ユスツプ・カディルハンが于闐を占領してから、于闐は喀喇汗王朝の一部に成って、イスラム教に改信した。モスクは徐々に仏教寺院に取り代わって、于闐の人々は次第に忠実な仏教徒から敬虔なムスリムになったので、万事は『コーラン』の教えによって、対応・処理しなければならなくなった。「喀喇汗王朝が于闐を征服した後、大勢のトルコ語族系の民族集団がこの地区に次々移住してきて、長期間の民族融合を経て、この地域の民族構成

4) 『維吾尔族簡史』編写組：『維吾尔族簡史』、第380頁、新疆人民出版社、1991年5月。

5) 『維吾尔族簡史』編写組：『維吾尔族簡史』、第380頁、新疆人民出版社、1991年5月。

6) 『維吾尔族簡史』編写組：『維吾尔族簡史』、第380頁、新疆人民出版社、1991年5月。

を変えた」⁷⁾。以来、ウイグル族及びその先人たちはホータンのオアシスで生息し続け、絶えず勤勉な労作で開拓し、独特なオアシス文化を創造した。ただ、ホータンの文化はイスラム教の形をとったが、昔からこの地域に蓄積されてきた様々な外来の文化は全く消滅せずに、イスラム文化と溶けあい、新しい形式で融通を続け、継承されてきたともいえる。

ホータンウイグル族の生活文化

特定の地理環境の下で、ホータンのオアシスで暮らしているウイグル族はその厳しい環境に最も適応する生計や生活様式を考案・創造し、発展させてきた。それはまず、衣食住や交通手段など生活文化の領域に集中的に反映されている。

民族衣装

ホータンウイグル族の女性にとって、伝統的な服装と言えば、主に長・短コート、チョッキ、ベスト、スカート、シャツ、長ズボンなどがある。女性達は1年中、スカートを着るのが好きで、秋と冬のスカートはその材質がわりと厚い、ビロード、金ベルベット、コールテンなどの生地をよく使う；夏のスカートはその生地に材質がわりと薄い、絹織物、シルク、綿などを普段使う。女性の間で最も人気のあるものはアドレス綯（絹織物）である。ウイグル族の女性はおしゃれが大好きで、季節によって異なる装身具を選んで、イヤリング、腕輪、ネックレスなどを常に身につける。また、眉を描いたり、爪を染めたりすることも大好きである。女の子は5、6の歳よりピアス穴をあけて、イヤリングをつける。彼女たちはオスマ草（奥斯曼草）で眉毛を濃く塗いたり、ホウセンカ（指甲花）で爪染めしたり、ナツメ木のゴムで髪につけて髪の毛を定型させ、また、花の花弁で口紅を作って、サクランボやバラの汁を使って、顔や唇を化粧する。これら天然の化粧品は、すべてホータンウイグル族の女性によって、長い労働や生活実践の中で考案されたものであり、彼女らの大自然に対する熱愛や美しい生活を慕う思いも反映されている。

ホータンウイグル族の男性はその伝統的な服装がわりと簡素である。主にコート（中国語で裕袷と言ひ、ウイグル語でチャパンと言う）、長衫、ベルト（腰の巾）、シャツ、ズボンなどがある。男性は1年中、濃い色の長ズボンをはいている、夏に白いシャツを着て、春、秋、冬にコート（チャパン）を着く。コートは単、綿付きの2種類あり、普通のコートにはボタンとポケットがなく、生地はわりと分厚く、黒色である。コートはホータンオアシスの自然環境にふさわしいと言える。昼間の日照は強烈で、温度も高く、

7) 仲高「転換期の于闐文化」、『西域研究』2002年第1号、第66-67頁。

夜は気温が急に下がり、1日の温度差が大きいことから、長いコートは風や砂ほこりを防ぐのに有効であり、また、脱着が便利で、夜の布団としても使えるし、非常に実用的な機能を持っている。ウイグル族の男性は小刀を随時、身につける習慣があり、農業、牧畜業、園芸業など生産や労作の場面だけではなく、また肉料理を食べたり、果物を切ったりするときなど、彼らの日常生活においてもナイフは欠かせない。

食文化

文化人類学の研究によると、生態環境や生計モデルは明らかに人々の飲食生活の構造に強く影響している。歴史から見れば、ウイグル族の先人=袁纥、回纥などの民族集団は、かつて遊牧民であるため、その主食は肉類であり、副食は稷、麦、豆、麻などであった。西に移動した回纥の一部はホータンオアシスに定住した後、牧畜業からオアシス農業を営むようになった。しかし、その変化の過程で彼らは遊牧時代の、食べ物を焼く方法を温存し、と同時に農耕民の、食べ物を煮る習俗を受け入れたのである。例えば、ウイグル族は麺食を主食とし、肉食を副食とし、主食になるものは小麦、米、トウモロコシなどの五穀であり、果物や野菜なども消費する⁸⁾。焼き食はウイグル族の食文化の特色とも言える。例えば、ナン（焼きパン）、焼き包子、焼き羊肉など様々である。確かに、主食に伴い果物をよく食べるのもホータンウイグル族の環境にふさわしい食べ方である。無論、イスラム教の普及によって、ホータンウイグル族の飲食生活は徹底的にイスラム教化された。

ホータンのオアシスは有名な果物の里とも呼ばれ、リンゴ、ブドウ、スイカ、メロン、ザグル、胡桃、桜桃、赤いナツメ、砂漠ナツメ、桃、杏、イチジク、梨、アーモンドなど、数多くの果物の産地であるため、一年中多品種の、かつ新鮮な果物が次々と出荷される。実に殆どのウイグル族民家の庭で、たくさんの種類の果樹が植えられ、化学肥料や農薬を使わず、天然の果実がよく実る。

ウイグル族は、古くからお茶を珍重してきた。お茶は飲み物として、ホータンオアシスのウイグル族の毎日に欠かせない。ウイグル族のよく飲んでいるお茶の品種は、紅茶、ミルク茶、バター茶、果実茶、氷砂糖のお茶、薬湯のお茶などがある。果実茶、氷砂糖のお茶、薬湯のお茶は客をもてなす時に用られる最高の飲み物であり、特に薬湯のお茶の一種「ダリダルマン茶」（各種植物からの茶）が、体によく、豊かな栄養を補給する機能を持っている。

8) 奇曼・乃吉米丁、熱依拉・買買提：「維吾爾族飲食文化與生態環境」『民族問題研究』2003年第9期。

民家の建物

ホータンのオアシスではウイグル族の民家建築も特徴的である。普通の農村において、農家の家屋は殆ど小さい庭に囲まれた土木構造の何軒かの平屋である。普段、寝室、応接室、台所、水部屋（ウイグル族がふだん洗浴に使用する部屋）などにはっきり分けてある。家屋の屋根は皆、平らな形で、そのうえで食糧を日干ししたり、雑用品を積んでおくことができる。民家の建物の構造はわりと複雑で、殆どの住宅は少し高い塀によって外とは隔てられている。ドアは両扇で囲塀の正面側で開き、そのドアの広さは馬車が出入りできる程度である。ドアから庭に入って、廊下を通じて、外庭に着く。その庭のドアに近いところに、家畜・家禽を飼うための羊や牛の小屋がある。外庭に立って奥に向かい望めば、目の前に1列の家屋の背壁部があり、その壁の中央には一つのアーチ形の門がある。アーチ形の門から入ると、すぐに家屋のホールであり、ホールの右に応接室、寝室が位置されており、その左に小さい応接間、台所や貯蔵室がある。これらの部屋は全てスイートルームで、互いに通じ合っている門がある。ホールにはもう一つの内門があり、内門から出て行くと、両辺には家屋の前廊である。

ウイグル族は古くから、庭の緑化や周辺環境の保護を非常に重視してきた。現在においても、人々は家屋を新築する前に、まず、屋敷地の境内で木を植え、木の種類の多様性にも意識し、例えば、リンゴ、梨、ザクロ、ブドウなど様々な果樹、また、その周囲に再びいくつかセイヨウハコヤナギや柳などを植える。木を植えてから、数年を待った後、初めて家屋を建てるのが一般的である。

交通機関

ホータンのウイグル族は、駱駝を飼育する歴史が長い。駱駝は飢えに耐え、喉の渇きにも耐える強い能力を持っている。なので、砂漠の中で数百キロの重荷を背負って、長距離を歩き回ることに適合している。昔は駱駝を交通機関として使い、東西の文化交流や中継貿易に巨大な貢献を成し遂げたが、今現在においても、ホータン地区の辺境、例えば、山地の牧場、砂漠の中などでは、駱駝は依然として不可欠な交通機関である。ホータンでは、より普遍的な状況として、ロバ、牛、馬、ラバなどの畜力で駆動される単騎式や台車が重要な交通機関としてよく利用される。ロバはホータンのオアシスの農村地帯において、数の多い家畜であり、強い体力のみならず、粗末な餌にも耐え、台車の畜力として軽便かつ実用的で、すばやく、人々の外出、運送、荷物の運搬、バザール追いなど日常生活における多くの場合に、最も便利な交通手段であると思われる。言うまでもなく、近代社会に入ってから、自転車、オートバイや自動車などの交通機関も、徐々に普及してきている。

信仰と禁忌（タブー）：ウイグル族の精神世界

新疆ウイグル族の日常生活にはたくさんの禁忌があり、これらの禁忌は彼らの昔から世代を超えて信奉してきた宗教や長期間の風俗習慣に伴って形成されたものである。ホータンウイグル族の間も、例外なく、それらの禁忌が今においても温存されている。ホータンのウイグル族と彼らの先人はその長い史上において多種多様な宗教を信奉してきた、例えば、原始宗教、シャーマニズム、祆教、マニ教、ゾロアスター教、仏教、イスラム教などがあり、これらの宗教はホータンウイグル族の伝統文化に多かれ少なかれ、それぞれ影響を与えた。加えて、それらは人々の日常生活において、様々な場面や状況にしみ込んでいる。

ウイグル族のシャーマニズムと言えば、その崇拝の対象は大体3種類に分けられる：1) 大自然、即ち空、日、月、星、雷、風、火、山、水、林などの大自然及びその天候、現象であり、これらの自然や自然現象、それぞれの自然の神になる；2) 動物の世界、即ち神獣、霊獣などである；3) 霊界、つまり靈魂、亡霊、神霊などである。これらの古い信仰は、既にイスラム教に覆われたが、今現在、生活の底層において若干、少し残っている。

かつて漠北の草原で遊牧生活を営んだ時、回鶻可汗国の牟羽可汗（ぼううかがん）はマニ教を国教として擁立したことがある。それとほぼ同時に、ソグディアナ商人によりマニ教がタリム盆地にも持ち込まれていた。約紀元前1世紀の中葉頃、仏教はカシミールからウイグルの先人たちが生活していた于闐に伝わり、その後于闐国から高昌王国や亀茲に伝わり最後に中国の内地にまで伝わった。于闐国は特別な地理位置を持つため、仏教の東への伝播の際の中国に入る最初の駅であり、いわば、仏教の発祥地と中原の間のかけ橋にあたる地域である。仏教はホータンのオアシスで千年余りにわたり繁栄を極めたので、人々に対する影響は深く、大きかった。紀元400年に東晋の僧人法顕は『仏国記』の中で、于闐国の仏教について、「其国豊楽、人民殷盛、尽皆奉法、以法楽相娛」、すなわち、国は豊かで、国民が幸せで、仏教を厚く信仰しているなどと描写した⁹⁾。国学の巨匠季羨林教授はかつて「仏」と言う文字について、古代の于闐語から進化し、また「阿弥陀仏」と言う言葉もその于闐語によるサンスクリット語の音訳であると考証した。当時、于闐国は仏教文化の中心となっており、仏教はここでさらなる発展を遂げ、西域の全体、また中国本土へと伝播していった。いわば、ここは仏教の2番目の故郷でもあった。

11世紀にホータンウイグル族の先人たちがイスラム教を受け入れ、帰依した時から、

9) 新疆和田簡史編纂委員会：『和田簡史』、中州古籍出版社、2002年。

現在に至るまでイスラム教を信奉している。イスラム教がホータンウイグル族の物質文化や精神文化に与えた影響はとて深い。イスラム教は宗教でありながら、生活様式や行為の規範でもあり、または豊かな文化体系の一つでもある。ホータンでは人々はイスラム教の暦によって生活を編成しており、イスラム教の「クルバン祭り」や「ルズ祭り」を祝い、また、西暦の毎年3月21日に「ヌルズ祭り」も盛大に行われる。

ウイグル族の初期の哲学思想によると、世界すべてのものは水、土、空気、火など4つの要素から構成され、大地は人間、動物、樹木、草花の母であり、空は光明や雨の父であるなどと考えられた。宇宙の四方に光芒を放つ太陽、明るい月、まばゆく無数の星々があり、先人たちは天象の変化を観察しながら、日月星辰への崇拜を生じたが、今になってもいくつか禁忌として残っている、例えば、太陽の方向に吐いてはいけないし、その方向に向かって大小便をするのもきわめて不敬な行為と思われる。また、顔を洗わないままで太陽に向いてはいけない、そして、誓う時は太陽に向かって行うなどの習俗がある。もし、日食があったら、大きな声で叫んだり、器をたたいたりして、太陽の早期回復を祈る。月は古代のウイグル族にとって心より崇拜される対象であり、よく月の盈虚・満ち欠けにより生活のリズムを構成し、仕事を手配したりする。現代のウイグル族の間においても、月は神聖なものであると考えられる。例えば、月の方向に向いて吐きたり、小便したりしてはいけない、また、月の光の下で猥らな事をやってはいけないなどのタブーがある。古代のウイグル族は星辰も崇拜し、星々の神秘さに愛着を抱いて、その位置の変化などから人間の災害や幸運などを予測・判断し、そういった占いのことも信じている。今でも、普遍的な俗信として存在しているものとしては、空には地上の人々の全員と対応している星々があって、誰かの星の位置が高いなら、その人の運が良いなどと考えられている。

ホータン地区ではいつも干ばつの環境に囲まれ、水資源は非常に貴重である。水は生命の源であり、人や動植物の生存する前提条件であるため、ウイグル族にとって、水は自然的に崇拜される対象にもなる。ホータン地区の民間に、水に関するいくつかの禁忌がある。例えば、泉、川や湖に大小便したり、水源の所で洗濯したり、また手洗いおよび水に汚物を捨てたり、吐いたりするなどの行動は一切タブーとされ、禁止される。そうでなければ、水の神霊を怒らせることとなる。水に生命があると考え、不潔な容器などを使ってはいけない、また不潔な水で洗顔するのもタブーである。流れている水は生ける水として飲めるが、滞積の水あるいはたまりの水は飲むことが出来ないとも考える。

ウイグル族の先人はかつて「水草を追う」移動性の高い遊牧民であったため、緑の草、水、大地は生命が宿っていると考えられた。西へ移動し、ホータンのオアシスに定住してからも、農耕生活を営み続けている内に、植物を衣食の由来、「聖なる」ものとして見なし、木などの植物をも崇拜した。ホータンのウイグル族は小川の両岸、小道の両側、

農地や田舎の家の周辺、屋敷の中などで、木を植えることを非常に好む。両親の植える木々を保護する責任は、必ず子供にあり、まるで両親を尊重することと同じように木々を大切にす。ホータンのウイグル族は植木を愛護する伝統があり、今も、木々や他の植物に崇拜するいくつかの習俗が残され、禁忌として表れている。例えば、許可がない限り、庭、農地や道端の大きい木、特に老樹を伐採したりすることは絶対に許されない。なので、ホータンのオアシスでは樹齢 100 歳以上、200 歳以上の古木がたくさんあり、大切に保護されている。その中に「クルミ樹王」、「イチジク樹王」や「ブドウ樹王」などがあり、人々はこれら三本の「樹王」を「神様」と見なし、恭しく看護しながら敬愛する。厳しい砂漠環境の中で暮らしているため、人々は大自然の 1 本の草花樹木に対しても珍重している。

ウイグル族は動物を大切に愛護し、虐待したり、わざと傷つけたりするなどの行為を犯罪と見なす。ホータンの人々は鳥や猫などの小動物が好きで、鳥類を人間の友や幸福の化身であると見なし、小鳥を飼い、また鳥の肉を食べない。子供もそういった教育がなされ、鳥類を虐めたりすることは許されず、「小鳥を捕る人は、その手がぶるぶる震えて止まらない」といった諺がある。

様々な色に対する趣味観念は、ホータンのウイグル族の精神生活において、重要な一部である。緑色、黄色、青色はそれぞれ植生、砂漠と空の色と言われて、ホータンのオアシスを囲む自然環境の主色調でもあり、大自然の色に対する趣味は彼らの住んでいる生活環境を愛する気持ちを表している。ホータンは乾燥した砂漠のすぐそばにあるので、人々の生存、繁衍のため、緑のオアシス環境は重要である。ウイグル族は森や植生を保護し、植樹造林に取り込むことが生き残るために必要な要件であると考え、またそれはオアシス文明の特徴ともいえる。それゆえ、環境の緑化を特に重視し、緑色が好きである。赤色はホータンウイグル族の生活の中で、独特な意味を有し、青春、魅力、誠実、愛情、楽観的などを象徴している。ウイグル族の赤色に対する思いは、かつて先人たちが信仰していたシャーマニズム、ゾロアスター教などとの関係がある。ホータンの人々はまた青色も好きで、青色に特殊な審美感情がある。これもシャーマニズムから由来したと言われる。シャーマニズムは大自然を崇拜し、天地日月、山や川、雷、青空などすべての自然を崇拜した。その他、黄色はホータンのウイグル族にとって、大地や砂漠の色と見なされ、ホータンオアシスの生活環境を象徴している。最後に白色と黒色もあり、ウイグル族が白色と黒色を重んじる根拠はおそらく彼らの古い自然観や宇宙観から由来したと考えられる。

オアシスの恵み：ホータンの「三宝」

ホータンは「シルクロード」中段の南道における要衝であり、様々なものや旅人、隊

商の集散地や中継輸送の重要な拠点でもある。ウイグル族は地元の自然条件を利用し、東西貿易の長い歴史の中で、シルクロードにおける独特で、且つ名高い「ホータンの三宝」を創造した。

玉石

「玉」は世界で、特に東アジアの人々に広く歓迎されている宝石の1種である。玉は硬玉(翡翠)や軟玉を含む総称であり、広義の「玉」は硬玉と軟玉だけではなく、蛇紋石、青金石、瑪瑙、珊瑚、マープルなども含む。軟玉の中でも、角閃石、陽起石の類は英語で Nephrite と呼ばれる。軟玉は前ソ連の化学者に「中国玉」と名付けられた。実際には、軟玉のカテゴリは文化によって分類され、その大半が国際通用の標準で玉であると見られなくても、数は多くないがいくらかの国(例えば、中国)では、玉の1つに分類・認められ、交易される。国際的に通用する「軟玉」(透閃石、陽起石など)の標準から言えば、純度や材質の比較的高いものは新疆ホータンから出た玉石である。いわゆる「中国四大玉石」の中でも、ホータンの玉石は最高の玉と見なされ、中国の「国石」ともされている。四大宝石とはホータン玉のほか、独山玉(河南省)、岫岩玉(遼寧省)、緑松石(湖北省)である。その中でも、本当に鉱物学の分類により「軟玉」に属しているものはホータン玉と岫岩玉しかない。新疆のホータン玉はその純度が比較的高い軟玉の1種である。ホータン玉はガラス=油脂のような光沢を持って、その色は含まれる異なる鉱物成分により、純白から霧状の黒まで様々に現れ、変化に富んでおり固定的な形態ではない。また、ホータン玉は玉の中では韌性が強く破損しにくい特性を持っている。

長い歴史から見れば、玉器は古くからホータンオアシスの特産物として、シルクロード沿いで有名である。于闐は色鮮やかな高品質の軟玉(ネフライト)の産地として知られており、イラン、アフガニスタン、インドなどで出土した記録がある。特にホータンの軟玉は色鮮やかで、油脂のように光沢を持っていることから、中原の人々に「和田玉」=「羊脂玉」と称賛され、珍重されてきた。

中国の古代史において、ホータン玉は「于闐玉」と「崑崙玉」とも呼ばれ、西域の莎車国(ヤルカンド)、于闐国などが有名な原産国とされた。司馬遷『史記・大宛列伝』の中には、「汉使穷河源、河源出于闐、其山多玉石」、すなわち、漢の使者が黄河を遡って、于闐に辿りついた、于闐の山には玉石がたくさんある」と書かれている。『漢書・西域伝』の中においても、「莎車国では鉄山があり、青玉が出る」という記録があった。モンゴル帝国初期の功臣耶律楚材の『西遊録』によると、「于闐玉」は「烏白玉」とも呼ぶという記録がある。また、考古学の資料に基づいて、于闐玉が中原に流入したのは、今よりも七千年前の事で、中原の先史時代の仰韶文化遺跡の中から、ホータン玉が発見され、出土されたと立証することが出来る。シルクがシルクロードの主な貿易商品にな

る前に、玉は西域辺境と中原、東方と西方の間の貿易交流の重要な貨物であり、長い歴史を持っていた「玉の道」がかつてあったと言える。ホータン玉は西域と中原の文化交流にとってとても大事な媒介として、重大な影響を發揮した。

玉器は中原文化にとって、特別な象徴的意味がある。『礼記』の中には、「古之君子必佩玉，……君子无故、玉不去身、君子于玉比德焉」、即ち、君子は必ず玉を身に着ける、特に理由がなければ、その玉を身から離してはいけな、なぜかという、玉は君子の品格の象徴であるからだなどと書かれている。古代の中原人は「玉」を修身の標準や君子の美德の象徴と見なし、玉の硬さを品格、玉の鮮やかさを純潔に譬えた。中国における玉器の宝庫の中で、重要な大玉、礼玉、貴玉などはほとんどホータン玉で作り出された。このように、中原地区のホータン玉に対する需要がとても大きかったため、玉器の道を開通したといえる。現在、海外の著名な博物館や大学に収蔵されている中国の玉器の中では、先秦時代の少数の玉器を除けば、ほとんどがホータン玉である。例えば、ベルギー皇室歴史芸術博物館、米国ハーバード大学の福格博物館に収蔵された東周時代の玉器はホータン玉の製品であるし、大英博物館で珍藏された中国やインドの玉器など、その玉料は殆ど崑崙山から採取したホータンの玉である。

絹織物（シルク）：「アトラスの絹」

シルクとは繭から得られる天然の蛋白質の繊維＝生糸を使って、編み織られる織物である。シルクロードと言え、中国本土から西へシルク製品を輸送するイメージが一般的だが、実は古来中国の王朝と密接な関係を持っているオアシス都市ホータンからも、中国本土へ絹製品を輸出した歴史的事実がある。3世紀から4世紀にかけて、ホータンでは麻布、絹布が多く生産され、唐代の史書でも織物がホータンの特産品として挙げられている。10世紀に、于闐国の王はかつてホータンで作った「胡錦」、「西錦」をたくさん持参し、中原へ赴いて交易をしたが、その「胡錦」、「西錦」は中原の人々によく歓迎されていた。

ホータンはシルクロードにおける有名なシルクの里であり、蚕桑の年間総生産量は、およそ新疆全区の生産量の70%以上を占めている。中華人民共和国が成立する以前にホータンで産出した繭や生糸など、一部は輸出していたが、その大半は地元で「アトラスの絹」を作るために使われた。「アトラスの絹」とはホータン地元の有名な特産品であり、「アトラス」とはウイグル語で「絞染めの絹織物」を意味する。それはホータンウイグル族の女性にとって大切なものだけではなく、新疆全区のウイグル族女性はすべてアトラスで服を作って着るのを好み、それに、中央アジアなどのいくつかの国、特にウズベキスタンでは、とても人気な商品でもある。ホータン地区のほとんどの県や郷、鎮では「アトラスの絹」を産出しているが、最も集中的な生産地としては、ロプ（洛浦）

県の吉亜（ジーヤ）郷である。吉亜郷は玉龍喀什（ユルン・カシュ）川に依って、蚕桑の重要な生産地域でありながら、同時に「アトラスの絹」の中心的な産地でもある。ここでは、ほとんどの家に工房があり、全て「アトラスの絹」を作ることができる。吉亜郷の工房では、最も古い絹布の製法が継承されていると言われる。

羊毛による手織りの絨毯

ホータン絨毯は羊毛を手織りして作ったものであり、中国の手織りの絨毯体系の中においても、とても重要な構成として認められている。主に新疆のホータンで生産されたため、「ホータン絨毯」と呼ばれる。ホータンの羊毛手織りの絨毯は精密な芸術であり、それは今では国内外の消費者の間で強い人気がある主な原因の一つである。ホータン絨毯はホータン羊の羊毛で織っているため、その繊維の太さがちょうど良く、弾力が大きく、張りが強く、弾力性に富んで、手触りがよく、柔軟で、絹糸のような光沢もあり、長期間使っても退色しない。ホータン絨毯は毛落ちせず、丈夫で長持ちし、その防湿抗腐性は良く、評判が良い。

ホータンの手織り絨毯の図案は独特な風格を持っており、色調は優雅かつ上品でユニークである。図案の構造について、ウイグル族芸術の特色を表している。植物の花、果実、枝葉や各種類の動物の紋様がよくデザインされ、また、変化に富むいくつかの幾何学的な紋様もよく考案されている。図案の組織は殆ど定型になり、その内容や形式は大きく分けて8種類である：アナルグリ・ヌスカ（ウイグル語の意味はザグルの花文様）、シラム・ヌスカ、ケリケン・ヌスカ（ウイグル語の意味は波の文様）、イラン・ヌスカ（ウイグル語の意味はイラン風の文様）、チャチマ・ヌスカ（散りばめた文様）、パットヌス・ヌスカ即ちエディヤル・ヌスカ（ウイグル語の意味は毛布の柄とお盆の文様）、ベシ・チェチャック・ヌスカ（ウイグル語の意味は五つの蕾花の文様）、ロンカ・ヌスカ（ウイグル語の意味は花瓶の文様）などである。また、礼拝用の絨毯や近代風の絨毯や、人物、花、鳥や景色の壁掛などの絨毯もあり、それぞれのデザインは各自の特色を持っている。

清王朝の時代に、ホータン地方の官僚は朝廷へ入貢した時、貢ぎ物の中には必ず絨毯があった。今なお故宮博物院で陳列されている物の中にホータン絨毯がある。現在、ホータン絨毯の主な品種は（糸の数字）360本、400本、450本、540本、720本、900本など、人物、景色のデザインが織り入る芸術的な壁掛けの絨毯など、科学染め、植物染めの絨毯を含めて、様々である。そして、一部には絹糸で織った絨毯である。また、サイズの大きさによって、200以上の種類があるが、形式によって、細長い形の廊下用の絨毯、各級の応接間、寝室、書斎用の絨毯、丸形の絨毯などがある。さらには飛行機、船舶や車で敷くことができる絨毯もある。

まとめ：ホータンのオアシス文化の多元性

上述したように、ホータンのオアシス文化の独自性は主にその多元性にある。ホータンのオアシス文明は農耕文明や遊牧文明の溶け合わせによって、一体になった基礎の上で形成されたオアシス農業や商業文明である。ホータン地方は乾燥し、雨が少ないため、主に崑崙山の解けた雪水に頼って灌漑し農作物を育ててきた。そのため、古代、近代にかかわらず、全ての統治者は水利建設を非常に重視し、水資源の管理に対する特定の方法を講じてきた。例えば、ホータンで出土した古文書によると、農村あるいは寺院は生産のため、井戸や渠を掘ったり、干ばつを防ぎ、耕地の面積を拡大したり、また耕地の灌漑施設を整理や補修したりする。農家は水を使うことを厳しく制御され、官吏の許可を得なければならなかった。ホータンにおける漢代の遺跡から、灌漑の渠道がよく発見された。また、出土したカロシュティー文書によると、各級の役人が水利灌漑を管理し、灌漑水を使う回数も詳しく記録され、農民たちが必ず水道料金や種子の料金を支払わなければならないこと、水を分け、水を借りることなど、一定の手続きがあったと記録された。ホータンのオアシス農業は古来より畜産業と結び付けて発展してきたが、その牧畜業についても、一定の管理制度があった。

ホータンのオアシス文化の多元性は人種の複雑性、民族集団や宗教文化の重層性などを表している。例えば、ホータンのオアシス文化は異なった時代に伴い、相次いでマニ教、仏教やイスラム教などの影響を受けた。と同時に、ホータンはシルクロードにおける東西文化交流の中枢の1つとして位置づけられる。音楽文化を例としてみれば、漢の時代に「于闐仏曲」が中原に流入し、漢王朝の宮廷で演奏され、その音楽の優美かつ愉快的なメロディは漢の高祖の関心までもをひきつけた。南北朝の時代に、于闐の音楽や踊りは中原を風靡した。また、唐の時代になって、「于闐音楽」が当時の『十部楽』にも収録された。これらの例からわかるように、長い歴史において、ホータンのオアシス文明は大量の外来文化を汲み取っただけではなく、同時にホータン独自の文化を築き上げ、シルクロードを通して中国本土や中央アジア・西アジアの多くの地区へも伝わった。ホータンのオアシスは民族や宗教の十字路でありながら、文化のるつぼでもある。ホータンは巨大な文化市場として、異なる民族、異なる地域の文化がここで溶け合い、新しい文化が生み出されたのである。ホータンのウイグル族は外来文化を吸収し、また、自分たちの文化を東へ、西へ広めていく過程で、ホータンのオアシス文明の開放性が実現されたのである。

中国の長い歴史から考えると、シルクロードは長らく対外「開放」といった重要な機能を発揮している。中国の歴史の発展にとって、外来の民族、外来の思想、信仰、風俗などとの相互影響は不可欠なことであった。本論文がホータンのオアシス文明の歴史や

特徴などを概説したことにより、指摘したいのは、中国本土、即ち中原地区の発展がシルクロードを通じて、多くの「他者」や異文化と接触し、また「他者」や異文化との往来、交流により、大いに助けを借りてはじめて一つの巨大で豊かな文化体系を築き上げられたのではないかということである。季羨林氏が「民族の大きさや、世界文化に大きな貢献を遂げたかどうかにかかわらず、すべての民族はいつも外来の文化を受け取っている」¹⁰⁾と指摘したように、まさに、ホータンのウイグル族もまったくその通りであり、長い歴史において、ホータンのウイグル族がずっと開放的で、且つ進取的な民族として、何千年にわたって、シルクロード沿いで活発な役割をし、いろんな文化を吸収しながら、独自のアイデンティティを始終維持している。(邦訳：周橋)

10) 季羨林：「西域在文化交流中的地位」、『仏教與中印文化交流』、江西人民出版社、1990年。